

な ぐも なお じ
南 雲 直 二

学位の種類 博士(教育学)
学位記番号 教 第 87 号
学位授与年月日 平成10年4月22日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 脊髓損傷における心的外傷の諸相と援助に関する研究

論文審査委員 (主査)

教授 村 井 憲 男 教授 菅 井 邦 明
教授 新 谷 守

論 文 内 容 の 要 旨

脊髓損傷は、損傷髄節以下の身体的、動物的機能を廃絶に追い込むばかりでなく、自己を含む心理学的構造を根底から改変し、それまで暗黙のうちに前提となっていた社会との関係を侵食する。本論文は脊髓損傷におけるこうした心的外傷を評価し、そこからの回復への援助を目指したものである。

本論文は11章から構成される。第1章で脊髓損傷について触れ、第2章でリハビリテーション心理学が果たしてきた役割と課題について述べ、第3章で伝統的な理論である障害受容理論の問題点を指摘している。

第4章から第10章は本論文の中核となるもので、脊髓損傷患者のリハビリテーション心理学が果たしてきた役割と課題について述べ、第3章で伝統的な理論である障害者受容理論の問題点を指摘している。

第4章から第10章は本論文の中核となるもので、脊髓損傷患者のリハビリテーション期に出現する種々の心的様相を心理学的な視点から詳細に分析し、それらに対する介入について述べている。まず、第4章は脊髓損傷患者の初期から共通にみられる心理症状に関するものである。すなわち自己という心理学的構造がどのような改変を被るかについて分析し、その結果、離人化と

“とらわれ”の関係が症状形成の中心的役割を担うものであることを明らかにした。次の第5章から第6章では、一部の脊髄損傷患者にみられる心理症状に関するものである。第5章では、リハビリテーション医療期における“せん妄”を取り上げている。せん妄は外傷性頸髄損傷患者37人中13人(35%)に発現し、脳挫傷または第6頸髄以上の感覚消失域を有する患者に有意に多発することが明らかにされた。さらに、せん妄後の心理的帰結の一つとして、うつ状態を呈する危険性も示唆された。この脊髄損傷患者のリハビリテーションに出現するせん妄の問題は、これまで体系的に検討されてはいなかった。第6章では、受傷からリハビリテーション医療期までに見られる“うつ状態”を取り上げている。外傷性脊髄損傷患者55人中19人(34%)に“うつ状態”を取り上げている。外傷性脊髄損傷患者55人中19人(34%)にうつ状態が発現した。発症開始は比較的広い時期に分布し、受傷後1ヵ月未満58%、1～3ヵ月未満16%、そして3～6ヵ月未満26%であった。うつ状態は、①脳挫傷またはそれが疑われる患者、および②受傷後せん妄を示した患者に多発した。これらのうつ状態は概ね2、3ヵ月で寛解した。したがって、リハビリテーション病院入院時におけるうつ状態の発現率は、9%(105人中10人)である。しかし、③「我慢できない痛み」を伴う患者では疼痛緩和が得られない限りうつ状態も持続した。

心的外傷が後年の心理に与える影響が著しいものであることを明らかにするために、第7章と第8章で後年のうつ状態、そして第9章で自殺を取り上げている。第7章は、リハビリテーション医療終了後の入所施設においてADL(日常生活動作)訓練や職能訓練を続ける頸髄損傷者に見られるうつ状態である。2～3年の継続的な観察結果は、うつ状態の多くが慢性に経過する気分変調症であることを示し、その発現率は37%(63人中23人)であった。またその危険因子として、人格的特徴と薬物長期連用が特定された。薬物長期連用が危険因子の一つであることは、同意を得て薬物投与を中止した3人の患者で、気分変調症が寛解したことからも示された。第8章は在宅脊髄損傷者におけるうつ状態である。2年後の追跡調査の結果、多くは気分変調症であることが明らかにされ、その発現率は122人中19人(15%)であった。慢性疼痛を併せ持つ者や知的水準の低さ、または情緒不安定、社会的不適応、活動的、外向的人格的特徴を持つ者に有意に多発した。第9章では自殺を取り上げている。従来の報告の分析から、脊髄損傷における自殺既遂率が一般人口のそれに比べて高率であることを示し、同時に自殺企図歴、無抵抗・無反応、あるいはせん妄、頭部外傷が、脊髄損傷者における自殺の重要な危険因子であることを示唆した。

心的外傷はまた、当事者のみならず家族にも深刻な影響を与えるものである。第10章では、脊髄損傷を含む中途身体障害者を在宅で介護する家族に見られるうつ状態を主に分析した。その結果、介護者307名において“介護うつ”は21%に発現し、ADL(Activities of Daily Living:日常生活動作)の能力を示すバーセル・インデクス得点が低いかまたは痴呆を併せ持つ人の介護者や1日の介護時間が3～4時間を越える介護者、あるいは医療・福祉サービスの利用度がむしろ高い

介護者に有意に多発することが明らかにされた。

最後の第11章において、新しい援助システムについて述べている。ピア・サポートは当事者同士がお互いを助け合うシステムであり、①同じ障害者であること、②誰よりもいたわることができること、および③「援助するものももっとも援助をうける」といった機能をもっている。これらの機能によって従来よりも良質なサービスが提供される可能性について触れ、ピア・サポートの取り組みの実際について述べている。

論文審査結果の要旨

脊髄損傷は、傷害を受けた脊髄神経支配以下の運動麻痺や知覚麻痺という重篤な身体機能の障害をもたらし、同時に不安、恐怖あるいは抑うつといった心理的な反応をひきおこす。外傷脊髄損傷のように、身体的変化が急激かつ深刻な場合の心理面への衝撃の大きさは想像に難くない。本研究は、このような外傷性脊髄損傷患者の心的側面を評価し、それに対する援助の方策を明らかにすることを目的に行われた。

脊髄損傷患者約750名を対象とした面接調査や質問紙調査の結果から、リハビリテーション医療期の患者に共通にみられる心理的特性は、離人化や強いこだわり、そして自立性の喪失や過度の依存性によって特徴づけられることを明らかにした。また、一部の患者ではせん妄がみられることがあり、この時期に出現するせん妄は後年になって現れるうつ状態と関連があることを見いだした。脊髄損傷患者のせん妄については、これまで体系的に検討されてはならず、後年のうつ状態との関連を示唆した報告は本研究が初めてである。

さらに、脊髄損傷患者に見られるうつ状態について、受傷からリハビリテーション終了後数年間にわたり、約60名の患者を対象に継続的な面接調査や観察をもとに検討した。その結果、うつ状態の大半が受傷後約1ヵ月未満に発症すること、その多くが慢性に経過すること、また人格特性や薬物長期連用などがその要因となること、などが明らかにされた。脊髄損傷患者のうつ状態やそれと関連する自殺の多くが、心的外傷の長期的影響の結果であると簡単に結論づけることは出来ないが、ここでの知見は、脊髄損傷患者の援助方策を講じる上での示唆を与えるものと評価できる。

脊髄損傷は、当事者のみならずその家族にも深刻な影響を与える。本研究では、脊髄損傷を含む中途身体障害者を在宅で介護する家族のうつ状態についても検討している。その結果から、脊髄損傷患者の介護者に比較的高率にうつ状態が発現することが明らかにされた。

最後に、脊髄損傷患者に対する新しい援助システムとしての、ピア・サポートシステムの有効性

とその取り組みの実際について述べている。これまでの価値転換理論や傷害受容理論にもとづく脊髄損傷患者への心理的援助システムは、必ずしも十分に機能しているとは言い難い。それに代わるものとしてピア・サポートシステムを取り上げ、その可能性を示したことは評価に値する。しかしながら、本システムの有効性を実証するためには、さらなる検討が必要であろう。

以上に述べたことから、本研究は今後の脊髄脊髄損傷患者のリハビリテーションの実際に寄与するところが大きいと判断される。

よって、博士（教育学）の学位を授与するに相当と認める。